

資料展示

<歴史に見る災害(2) 正岡子規と明治三陸大津波: 新聞『日本』・『風俗画報』より>

「五月雨は/人の涙と/思ふべし」「皐月(さつき) 寒し/ 生き残りたるも/ 涙かな」

正岡子規(1867-1902)

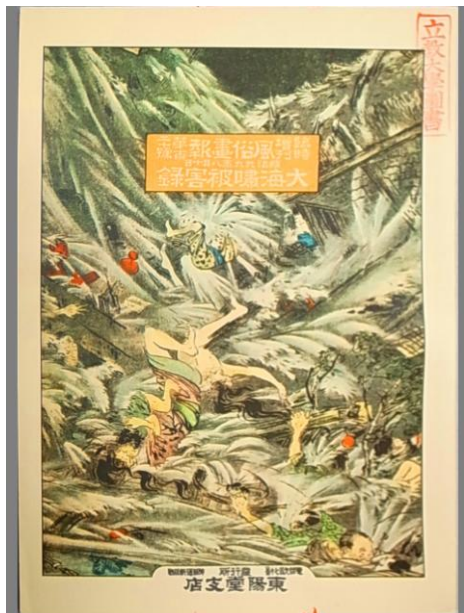
明治29年(1896年)の端午の節句5月5日(新暦6月15日)に東北地方を襲った「明治三陸大津波」は、瞬時にして2万2千人の命を奪いました。三陸(陸奥・陸中・陸前)という地名は、これ以降、一般的に使われるようになったと言われています。東日本大震災と同様の海洋プレート型の巨大地震によるものでした。

冒頭の俳句は、ちょうど日清戦争の勝利に浮き立つ当時、新聞「日本(にっぽん)」の記者だった正岡子規が、酸鼻をきわめた津波の被害について書いた新聞記事のなかで詠んだものです。子規自身も結核の病に侵され闘病の最中でした。激甚な災害への悲痛な思いは今も昔も変わりません。まだ写真も一般的でなかった明治期には、画家が新聞取材に同行し雑誌の記事に挿絵を描いたりして被害状況を伝えました。新聞『日本』(復刻版)中の子規の俳句、日本のグラフ誌の草分けとされる本学所蔵の『風俗画報』から「明治三陸大津波」の挿絵部分などを展示します。

立教大学図書館

<展示資料>

1. 『子規全集』全22巻 講談社 1975-77 より
2. 『日本』 第23巻 明治29年、明治30年25巻 日本出版社
(復刻版: ゆまに書房 1988-1991年)
3. 『風俗画報』臨時増刊 第118-120号 1899年7月10日~8月10日
東陽堂 (立教大学江戸川乱歩邸所蔵資料)
4. 『風俗画報』【復刻版】第5分冊 1974 明治文献(株)
(立教大学図書館 新座保存書庫所蔵資料)
5. 『写真記録: 近代日本津波誌』山下文男著 青磁社 1984

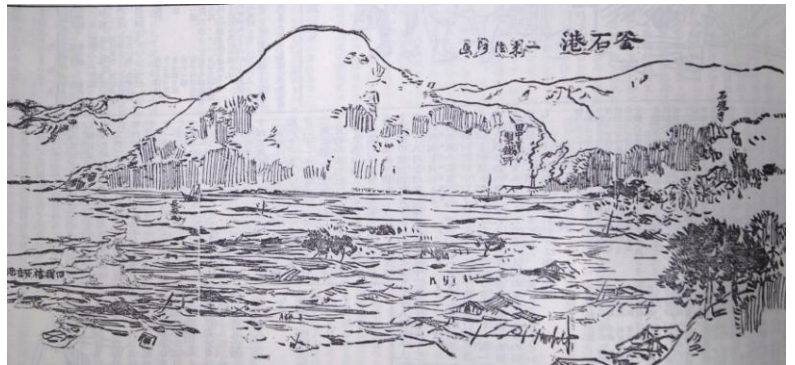


「海嘯 (かいしょう)」 十四句

文学部教授(文学科日本文学専修) 加藤定彦

明治二十九年六月十六日、新聞「日本」は、治安妨害を理由に発行停止処分を受けた。停止を解除されたのは一週間後の二十四日で、その一面に「解停社告」と巻頭論説、三陸大津波の被災状況を取材した雑報「海嘯惨記 (一) (二)」(特派員ナンパチ)、「海嘯実記 (一) (二)」(特派員犬骨坊) が掲載される。犬骨坊の記事には、「大海嘯の報は『日本』停刊の報と共に来る。即ち不折画伯と共に結束して急行先づ仙台に向ふ。」との前文がある。大津波の報は電信で十五日中に届いたから、パニックを恐れ、発行停止を命じた可能性皆無とはいえない。それはともかく、犬骨坊と中村不折の二人は被災地の惨状を取材し、記事や挿絵を送りつづけ、二十二日夕、気仙沼に着いた。ところが、汚染した飲料水にやられて不折は激しい腹痛にダウン、犬骨坊も腹痛気味となった。翌朝、不折の腹痛は治まったけれども、体力の消耗を気遣って強いて宿に残し、犬骨坊はひとり気仙沼を発ち、取材をつづける。

五日後の二十九日、「日本」紙上に、「海嘯」と題する無署名の時事俳句が載った。「六月十五日、恰(あたか)も陰暦の端午に際して東北海岸幾万の生霊は一夜に海嘯(かいせう)の為に害(そこな)はれおはんぬ。あはれ是れ程の損害、天災にも戦争にも前代未聞の事どもなれば、聞くこと毎に粟粒を生ぜずといふことなし。」と前書き、「ごぼごぼと海鳴る音や五月闇」「菖蒲葺(ふ)いて津波来べしと思ひきや」の二句からはじまり、前書きを所々に挟んで全十四句から成る。



新聞『日本』より、釜石港の津波被害

*

これら無署名の句群は、定説では子規の作とされている。子規は、明治二十五年十二月、新聞「日本」に入社、翌二十六年二月から俳句欄を新設して選者となり、ほかにも社の同僚五百木飄亭(いおきひょうてい)らと時事俳句を載せたり、馬骨(子規)、犬骨(飄亭)のペンネームで「時事句合せ」を合作したりしている。

明治二十七年八月、日清戦争が勃発すると、松山医学校出身の飄亭は衛生兵として応召、犬骨坊のペンネームで「従軍日記」を「日本」に連載する。士族の血を引く子規はこの連載に刺激を受けて従軍を志願、翌二十八年三月三日、内藤鳴雪ら知友に見送られて東京を発ち、一旦、郷里松山に寄ってから広島で近衛師団に従軍の許可を得、四月十日、宇品から出航、十三日、遼東半島の先端、大連湾に入港する。十五日、やっと柳樹屯に上陸、ただちに金州へ赴く。しかし、二日後の十七日、講和条約が締結され、結局、戦闘を取材することもなく、金州滞在中は第二軍兵站(へいたん)部軍医部長の森鷗外を毎日訪ね、俳談に時を過ごした(森鷗外「徂征日記」)。



子規自画像、『俳人の書画美術』7巻より

従軍の始終は「陣中日記（一～四）」「従軍紀事（一～七）」として新聞「日本」および「日本付録週報」に連載されるけれども、「陣中日記」五月十日の記事に「講和成り万事休す」と記されるように、講和条約の批准で武勲（？）の夢はあっけなく泡沫に帰した。その日、近衛師団付記者たちは帰国のため、金州から柳樹屯に移動となり、子規は鷗外に几董（きとう、蕪村の高弟）の連句を手写した一冊を贈り、別れを告げる（「徂征日記」）。

記者仲間と佐渡国丸に乗り故国に向け出航、老朽船ですこぶる劣悪な装備のため、五月十七日に喀血。翌十八日、下関に着いたものの、コレラによる死亡者が出て一週間停船となる。二十二日、やっと和田岬（神戸市兵庫区）に着岸。「病漸（ようや）く重し」と前書きする「須磨の灯（ひ）か明石のともし時鳥（ほととぎす）」の句は、いうまでもなく鳴いて血を吐くという子規（ほととぎす）に自らを仮託したもの。翌二十三日、検疫所に入り、午後になって放免されるが喀血がひどく、そのまま神戸病院に入院する。「我門出は従軍の装ひ流石に勇ましかりしも、帰路は二豎（にじゆ、病気の意）に襲はれてほうほうの体（てい）に船を上（あが）りたる見苦しさよ。云々」（「陣中日記」）と苦衷（くちゆう）を吐露、日記を終えている。

*

危篤状態を脱した子規は退院してから八月下旬、郷里の松山に戻り、保養に努めつつ松山中学に奉職中の夏目漱石や高浜虚子らと盛んに句会を催す。十月下旬になると大阪を経て奈良に遊び、「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」の佳吟を得る。その月末、東京根岸の自宅にやっと帰還した。

明けて明治二十九年一月、子規庵で催された新年句会（第二回）には、軍医学校長となった鷗外や上京した漱石も出席して賑やかだった。しかし、二月には大阪で発症した腰痛が悪化、左腰が腫れて寝たきりとなった。三月十七日、リウマチの専門医に診察（み）てもらい、結核性脊髄炎と診断された。のちカリエスと判明、同月二十七日、手術を受ける。「余（われ）程の大望を抱きて地下に逝く者はあらし…」と絶望の淵に突き落とされたが、書を読んで気力を回復、四月には歩行も少しずつ可能となった。同月二十一日から新聞「日本」に「松蘿玉液」の連載をはじめ、五月四日には小説の効用を説き、樋口一葉の「たけくらべ」を賞賛し、同月十八日には鷗外が創刊した文芸誌「めさまし草」を批評したりもする。

*

かくして同年六月二十九日、無署名で「海嘯」の発表となる。一読した感想では、負けん気の強い子規のことだから、後輩記者、五百木飄亭（犬骨坊）の取材記事や不折の描く被災状況を紙面で目にし、唯一可能な対抗手段として「海嘯」十四句を発表したようにおもわれる。しかし、つぶさに子規の事績や言動を点検してみると、動機はライバル意識ばかりではなさそうである。「幸にして生き残りたるは親を失ひ、子を失ひ、夫を失ひ、妻を失ひ、家を失ひ、食を失ひ、命一つを浮世にもてあましたるも、なかなかにあはれならぬかは。」と前書きする「皐月（さつき）寒し生き残りたるも涙にて」「生き残る骨身に夏の粥（かゆ）寒し」など真率な想像句に照らすならば、相次いで死病に襲われた子規の苦悩の記憶が、生死の境をさまよう三陸の被災者たちに対する抑えがたい同情となって、「海嘯」十四句に結晶したようにおもわれるが、どうであろうか。

○海嘯(かいしやう)

六月十五日恰も陰曆の端午に際して東北海岸幾萬の生靈は一夜に海嘯(かいしやう)の爲めに害われおはんぬ。あはれ是れ程の損害天災にも戦争にも前代未聞の事どもなれば聞くこと毎に粟粒を生ぜずといふことなし。

ごぼごぼと海鳴る音や五月闇

菖蒲葺いて津波来べしと思ひきや

黒山の如き大波は毒舌を出だして沿岸のもの家とも言はず木とも言はず人とも言はず忽ちに舐め去りぬ。噫惨又惨。叫喚の聲耳に聞えて全身覚えず戦慄す。

時鳥救へ救へと聲急なり

蚊柱や漁村盡くつぶれたり

海松かゝるつなみのあとの木立かな

書顔にからむ藻屑や波の音

短夜やほろほろ燃ゆる馬の骨

幸にして生き残りたるは親を失ひ子を失ひ夫を失ひ家を失ひ食を失ひ命一つを浮世にもてあましたるもなかなかあはれならぬかは。

皐月寒し生き残りたるも涙にて

生き残る骨身に夏の粥寒し

天下の人誰か之を悲まざらん、死したるは棺なく生きてるは食なきに。

五月雨は人の涙と思ふべし

此頃は、蚩を見てもあはれなり

良民何の罪かある。憑夷(ひょうい※水の神)すべからく罰すべし。

若葉して海神怒る何事ぞ

長く東海の波を封じて再び此災害なからしむべきなり。

あら海をおさえて立ちぬ雲の峰

かしこきあたりには此事を聞しめしてより直ちに金圓を下し賜り侍従をして実況を見せしめらる。

夏草や甘露とかゝる御涙

「『日本』明治29・6・29」

注：「海嘯」(かいしやう)：満潮時に河口から潮が上流に向けて碎けながら遡る現象のことだが、「津波」と同義にも用いられた。

明治三十九年三陸大津波（一八九六年）

一八九六年六月十五日午後七時三二分、三陸沖、約二〇〇キロメートルの海底で起こったマグニチュード七・六の地震による津波。三陸沿岸での震度は二〜三で、震害は全くなかったが、震後、三〇分前後で沿岸一帯に大津波が襲来、岩手、宮城、青森の三県で約二万二、〇〇〇人が溺死した。波高は、岩手県の吉浜村（三陸町）、綾里村（同）などで、二〇メートルを超え、史上、第一級の巨大津波と記録されている。

日清戦争祝勝花火大会のさなか 一八九六年（明治三十九年）の六月一五日、その日はちょうど旧暦の五月五日、端午の節句にあたっていた。「日清戦争」で勝利をおさめた前年からの興奮と凱旋兵士の歓迎気分、それに春からの豊漁もあって、夕方からの節句の祝いは、例年になく賑々しかった。正月以来の祝いの日とあって家いえでは餅をついたりして祝いの膳をあげた。一族、友人が集まって酒もりをはじめた家、いとこ、親戚からの泊り客のある家も多かった。

午後七時半を回ったころ、ゆーらゆーら揺れる感じの地震があった。だが人びとはあまり気にとめなかった。五年前、陸地を震源とするマグニチュード八・四の濃尾大地震があり、七、〇〇〇余の人命が奪われていた。だから地震に対する警戒心は高かったが、この時の地震は、ああ地震だなーという程度で棚から物が落ちるほどのものですらなかった。それに三陸が津波常習地だといわれるようになったのはもっと後のことで、これに先だつ津波は、四〇年前の、ごくゆるやかだった安政三年の津波（一八五六年）、大津波は、一六一一年、「慶長一六年の津波」で、二八五年も昔のことであった。津波の恐怖はほとんど風化していたから、だれもこの小さい地震を津波と結びつけて考えなかった。

大槌町の花火大会では午後八時一〇分ごろ、第四発目の花火が夜空を彩り、人びとの歓声でどうめいていた。その時、百雷が一時に落ちるような轟音が響き、大地に微振を感じたと思うと、すぐ、二度の轟音があつて、もしかと思う間もなく、浜辺に集まっていた人びとの叫びとともに山のような津波が襲い来た。まったく瞬時のうちに数丈の狂瀾によって祝賀会場は一蹴され、木端微塵になった（死者六〇〇人）。地震から三〇分前後で突如襲来した凄まじい大津波であった。

（『写真記録・近代日本津波誌』 山下文男著 青磁社 一九八四年より）

『風俗画報』 119号 明治三十九年より

